

平成19年度第2回「これからの図書館のあり方」検討小委員会 議事録

1 会議名

平成19年度第2回「これからの図書館のあり方」検討小委員会

2 議題

- (1) 正副委員長の選出
- (2) 配布資料について
- (3) アンケート調査について
- (4) 意見交換

3 開催日時

平成20年2月22日（金）
13:00～

4 開催場所

北九州市立中央図書館内
視聴覚センター第2会議室

5 出席者氏名

(1) 検討小委員会委員

北九州市立大学学術情報総合センター長	棚次 奎介	委員長
北九州市学校図書館協議会会長	吉田 幸雄	副委員長
北九州市婦人団体協議会理事	浜崎 いつ子	
北九州市社会教育委員	服部 多恵子	
北九州市保育所連盟常任委員	中村 尋子	
成人読書会「四季」副会長	高畠 登美子	

(2) 事務局

中央図書館副館長	熊埜御堂 義明
中央図書館庶務課長	井上 好二
中央図書館奉仕課長	山本 達臣
中央図書館庶務課庶務係長	河野 吉彦
中央図書館奉仕課長	山本 達臣
中央図書館奉仕課奉仕係長	豊田 善正
中央図書館庶務課庶務係	山本 清貴
教育委員会生涯学習部長	林田 勉
教育委員会生涯学習課長	黒野 まゆみ
教育委員会生涯学習課管理係長	三瀬 茂弘
教育委員会生涯学習課管理係	舛田 覚

6 非公開の理由

「これからの図書館のあり方」検討小委員会は

- ① 委員相互の自由闊達で忌憚のない意見交換の場であること
- ② その審議の中では未公開情報・不確定情報の議論も予想されること

などから、「附属機関の会議の公開に関する要綱」第3条第3項により、今後の会議は原則として非公開とするが、その内容については後日、要旨をホームページで公開する。

なお、非公開の議事内容については未公開や不確定の情報も含まれることがあるので、検討小委員会関係者以外には秘密厳守でお願いする。

7 傍聴者

なし

8 会議次第

- (1) 正副委員長の選出
- (2) 配布資料について
- (3) アンケート調査について
- (4) 意見交換

9 会議経過（発言内容要旨）

(1) 正副委員長の選出について

図書館協議会と同様に棚次会長と吉田副会長を検討小委員会についても正副委員長に選任

(2) 配布資料の説明について

(事務局)

下記の配布資料について事務局から説明

- ①黒崎文化交流拠点地区の整備に関する新聞報道
- ②平成18年度 図書館サービス政令指定都市比較
- ③平成19年度予算 政令指定都市立図書館予算額比較
- ④館別年齢別貸出冊数（平成16年度～平成18年度）
- ⑤図書の帯出業務の実施状況の推移（平成17年度社会教育調査報告書）
- ⑥参考資料（全国的なデータ）
- ⑦これからの図書館像 ー実践事例集ー
- ⑧新しい図書館の資料（写真資料）

(3) アンケート調査について

(事務局)

アンケートについては、下記のとおり説明。

- ①対象者については幅広く意見を聴くように図書館協議会の中でも指摘がある

ので、図書館の利用者だけではなく、利用していない方も何らかの方法で調査をする必要がある。

②規模については、利用している方については、各館400人ぐらいあれば、信頼性がかなり高まるということを経験者から聞いている。

③利用していない方については、駅前、区役所、ショッピングセンターなども考えられる。規模としては広聴課が市民意識調査について3千人を調査対象として、1,747回収しているので、これが参考になるのではないかと。

④内容について、サービスに対するニーズは聞きやすいが、難しいのは配置についてである。利用していない方が、なぜ利用できていないのか、そこを調査できればと考えている。

(4) アンケート調査、図書館サービス、配置等に関する意見交換

(委員)

以前、市の方が各施設に図書館の登録者のカードを作ってもらえませんかと言って来られて、作ったことがある。利用率を上げるために、今、していないのか。

(事務局)

現在は、出張して受付のようなことはやっていない。例えば企業や官公庁の職員組合の方とか、そういう厚生部門の方をお願いして私どもの職員が行って何月何日昼休みに図書館カードの作成を承りますというサービスは可能である。

(委員)

自分の所属団体には、約2400名ぐらい会員がいる。その中で、そういう話があれば、加入する人がいるかもしれない。

(委員)

北九州市の図書館に係る予算などは充実していると再認識した。しかし、人口当たりの貸出冊数や登録率などが低いことが残念である。そこを上げていくための方針などを考えるのがこの会なのだという意識である。その中で、近くの人に聴いたり、実際に図書館に行って感じた点がある。ひとつは、IT化の部分でどうなのかということである。例えば、ヤフーの検索で、北九州市のホームページの組織の中の図書館は出てくるが、図書館のトップページは出てこない。これはないという認識でよいのか。

(事務局)

2年前ぐらいは確かに指摘のような状況であったが、1年前ぐらいにヤフーに依頼して北九州市立図書館で検索するとダイレクトに北九州市の図書館にリンクできるようにしており、今は大丈夫である。

(委員)

福岡市図書館で入れると福岡市の図書館のトップページが出る。北九州市いのちのたび博物館とかでも出てくる。しかし、北九州市図書館は出てこない。北九州市中央図書館でも出ない。

(事務局)

昨年の議会でも全く同じ質問をいただいている。市のトップページの構成と図書館のトップページの構成が全く同じものであるため、誤解されていると思うが、グーグルでもヤフーでも検索システムで検索していただければ図書館のトップページに来る。検索のキーワードによっては市のトップページに行くかもしれない。それと、いのちのたび博物館とか松本清張記念館は商業性があるので、単独のトップページを設けることを許可されているが、北九州の場合は市の統一された様式と検索のルールがあって、図書館の場合も教育委員会の組織なので教育委員会から流れていくというようになっている。したがって北九州市のホームページを開かれると、教育委員会から図書館へ2段階、3段階のクリックが必要であるが、検索ソフトでやれば、トップページに動く。

(委員)

組織の標準のフォーマットの中の形で出てくるということで、独自のホームページを持っていないということでもいいのか。

(委員長)

内容は独自であるが、様式やページのスタイル、フォーマットが市の統一されたもので作られているというだけではないか。

(事務局)

キーワードの入れ方によっては、順序が逆転する可能性があるかもしれない。少なくとも北九州市立図書館又は北九州市立中央図書館、北九州市中央図書館いずれでも検索すれば、図書館のトップページに行く。

(委員長)

同時に、そのページをもう少し魅力的なものにする必要がある。もう少しみんなが楽しくなるようなものが必要である。

(委員)

例えば、湯川市民センターで出せば一発で出てくる。そのことを考えると北九州市中央図書館で出ないというのはどうかという気がする。

(事務局)

議会の指摘もあり、アクセスしづらいという声も聞いている。利用者増のためにはホームページをどうするのか、アクセスしやすさや見やすい画面などを委員の皆

さんからも要望していただければ、我々もそれに沿って改善しやすくなる。

(委員)

I Tが急速に普及し、ホームページから何でも情報収集している今の学生とかビジネスマンの状況からすれば、ちょっと寂しい気がする。

(事務局)

委員の指摘はよく分かる。我々もレイアウト、デザイン、色使いなどしゃれた機能を付加したホームページを作りたいが、北九州市の場合、印象の統一のためにレイアウトとか色使い、活字まで、行政の統一性ということでやっている。また、多少コマースリズムがあるところは別にして、社会教育の担当部門がそこまでするのかという議論もあり、ご理解いただきたい。

(委員)

図書館未来構想研究会という文部科学省の委員会が作成した実践事例集が資料として今回出されているが、この中に画期的に利用者を伸ばした事例として、千葉県光町立図書館がホームページで情報発信した事例が載っているのを見ていただきたい。

(委員長)

利用促進の手立てや工夫も答申に加えていくので、それについてもご意見をいただきたい。同時に、今回どこに図書館を配置するかが焦点であるが、アクセスの面では交通の便や駐車場があれば、多少遠くても利用する。それからなぜ、北九州市の図書館の利用率が低いか、原因を分析しないと、どういう図書館を、どこに配置すべきか検討できない。地域的にはアクセスが大きなポイントになると思う。都市高速とか自家用車の普及で交通の便はよくなったが、駐車場がなければ、行きづらい。また、50年前に設置され、機能、利便性、施設・設備などにおいて問題があり、利用したくなる図書館、もう一度行きたくなるような図書館であるか点検を要する。その2点がポイントだと思う。だから配置もアクセスの確保を意識しないと利用率の高い図書館は難しい。加えてサービス面がある。ホームページなど、みんなに広く知らせる方法がないと若い人が集まらない。もう少し、なぜ利用率が低くなったか、いろんな角度から検討する必要がある。どういう図書館をどこに建てるにしても、それを押さえていないと、同じことになる。特に北九州市の立地は福岡市と違って都市として集中していない。それぞれの独立した都市が合併したので、非常に広域で、各図書館が各地域と密着する形で発展したと思うが、現在は建築された当時と環境が違ってきており、現在の状況の中でどのような図書館をどこに建てるべきかを検討しないといけない。

(委員)

県の図書館協議会で、子ども達が中学生になると図書館に急に行かなくなるとい

う意見が出されていた。高校生まで減っていく。この前も報告の中で出てきたが、(利用率を上げるためには) 1番は便利さだろうと思われる。そして2番目に環境である。行きたくなるような風景とか、資料の魅力性、新しさとかに大事なものがある。北九州市に隣接している遠賀町の図書館は、古かったが、新しくなったとたんに近辺の方たちが行っている。子ども達も行っている。駐車場も非常に止めやすい。北九州市の図書館は駐車場があまり広くないが、(利用率が上がらないのは) それだけではないと思う。

これは学校関係者の一番の宿題だと思うが、北九州の文化を高めるために、図書館利用はどんどん増えなくてはいけないのに、それが(中学生では)消沈している。読書指導をどうすべきか、根本から考えなければならない。

去年若園小学校に(建築家の)平井先生のモデルで図書室を造ったが、子ども達の入る量が変わった。今年また平井先生の意向で、学校で図書室をリニューアルしたら、子ども達が喜んで行く。大人も同じと思うので、これからの図書館で何回も行きたくなるといいと思う。

(委員)

子供たちが中学から高校にかけて図書館に行かなくなるのは、部活を始めて時間がなくなるためである。逆に、本を買って、ゆっくりと時間をかけて読むということもある。それもひとつの読書の形と思う。行けるときに来たら、また図書館へ行く。いろいろな読書の段階があると思う。孫たちが宿題などで結構ホームページをよく見ている。北九州の歴史を知りたいということで、北九州のホームページから、いろいろな市の関連のところに飛ばしている。その中で、何回もクリックしながら検索するのを見ていたら、それも一つの勉強と思う。

(委員)

委員が言われたように、中学、高校は時間的に厳しくて行けない、幼児期に図書館に行く習慣があれば、時間が出来れば、図書館に行こうという気持ちになれると思う。そういう意味では乳幼児期から小学校時代に図書館に親しませる、図書館に行かせるという工夫が非常に大事である。気になったのは若園小学校で児童の利用者がすごく増えたということで、図書室のあり方、配置、入ったときの印象とかで足の運び方が違って来たということである。

(委員)

前回(5年前の答申)は、生涯学習拠点としての図書館のあり方だったかと思いますが、今回は行きたくなる図書館としたいくらいで、本当にそうなれたらいいと思う。新しい図書館に関しては配置も含めてということで、新聞では厚生年金病院跡地は決定と出ていたが、決定でいいのか。

(事務局)

20年度は、調査費である。調査費が付いたらほぼ確定だが、どういうふうにする

るかは、図書館協議会の意見も入れていただこうと思っている。工事費ではないので、着工ではない。

(委員)

先ほど委員長から、配置について投げかけがあったが、まだ十分議論ができるという状態か。

(事務局)

あくまで、黒崎再生計画で出てきた話で、その中で図書館を市民のアンケートに基づいてやっていこうという方針であり、これを前提として議論していただきたい。どういう内容の図書館にするかは、別の話である。

(事務局)

場所について、副都心に相応しい都市機能ということで、厚生年金の跡地と決まっているわけではなくて、厚生年金跡地も含めた黒崎の中心市街地ということである。

(委員)

市民のニーズとしては、どこに配置してほしいというニーズがあるか。

(事務局)

黒崎のほかには、これからアンケートの中で、そのニーズが把握できるように工夫したい。

(委員長)

アンケート調査をどういう考え方でやればいいのか、あるいはその内容、対象者など具体的にどう考えて実施すべきなのか、その点についてご意見があれば。

どういう項目をアンケートの内容にすべきか、図書館利用者と利用していない人たちでは、その内容も違うものになると思う。たとえば図書館を利用している人に対しては、どこに住み、どういう交通機関を利用しているか、何回くらい利用しているか、利用目的は何か、そういった項目は当然必要になってくる。利用していない人は、なぜ利用しないか、そういったことがアンケートの結果として分かるような内容であるべきと思う。

(事務局)

市民意識調査が3千人に配って、回答は1700くらい返ってきているので、対象は同じくらいの規模にしないといけないと考えている。利用している人としていない人と両方採らないといけないので、利用している人は図書館で採ればいいが、していない人をどうするかである。

(委員)

市政モニターは3千人で、1,700くらいで、回収率が60%くらいである。それを考えると、ショッピングセンターで回答は集めるのは困難ではないか。無作為という意味ではとてもいいが、相当難しい。

(事務局)

市政モニターの場合郵送だが、もしショッピングセンターでするなら、その場で調査員が聴くということになる。そうでないと郵送しても帰ってこないと思う。

(委員長)

質問内容も簡単なものにしておかないと（回収率を高めることは）難しい。

(事務局)

委員から話があった乳幼児から児童まで本に親しめることが大事である。中学生の本離れもあるが、やはり彼らに利用してもらいたいという意味で、子どもをどのようにアンケートに取り込むかも必要ではないか。その意味では無作為もいいが、ある程度年齢をまとめることも必要ではないかと思う。

(委員)

無作為も大事と思いながら、乳幼児から小学生は親と一緒に図書館に行くことから、その意味では母親がどういう図書館だったら行きやすいか、母親がどう考えているか、なども大事である。検診や産まれたときなど乳幼児期はわりと役所とつながっているので、そこで、その辺の年齢層を捕まえるとか、採りたい年齢層と対象者に合わせて場所を選びながらでないと、ショッピングモールや駅だけということでは難しいのではないか。

(委員長)

新聞社等がアンケート調査するとき、サンプリングするが、電話でのアンケートも含めて、そういう方式は、業者に依頼するからコストがかかるのか。

(事務局)

サンプリングの方法などアンケートの専門性もあるので、専門家に相談したいと思っている。

(委員)

公民館（現市民センター）の地域（ひまわり）文庫の利用者は結構多かったのですが、地域におけるアンケートはセンターを通せば、かなり上がってくるのではないかと。

(委員長)

最近の若い人たちは、インターネットが随分普及してきて、自ら意見を述べ、反

応が返ってくるコミュニティの場としての利用の仕方が拡大している。いわゆる参加型である。図書館は、静かに読書をしてというのが、典型的な図書館のあり方であるが、それだけの図書館でよいか、今から問われてくる。相互交流できる空間があって、インターネットを使いながら図書館に対する意見や思いをお互いに探るといふ部分を大幅に取り込みながら、住民や若い人も含めて、図書館を育てる場ができ、そこに文化が芽生えていく。若い人たちは、そういう場を求めている。これからの図書館は、そういう場でもあってほしい。

(委員)

今度、造られる図書館は、戸畑図書館や若松図書館と同じ地区館となるのか、あるいは黒崎の中核にいろんなものを集めた施設となるのか、南区もそうなるのか、分館になるのか。

(事務局)

今の体制は中央図書館がセンターで、他は地区館が旧五市、小倉は中央図書館なので、門司、若松、八幡、戸畑図書館と後は分館と市民センターにひまわり文庫がある。こういう体制が、今の時代にふさわしいかどうか、1番大きい論点である。全体の体制をどのようにしていくのかは非常に重要な論点になる。

(委員)

大きな機構としては中央図書館が中心で、地区館、分館、ひまわりがあって、理想的な形と思う。図書館に特色がない、老朽化して使いにくい、駐車場がない。そんな中で、今から建つ図書館をどういうものにするかは、最近できた図書館では、それを作るための検討委員会が立ち上がり、市民、専門家や建築家の意見など何回も議論し、本当にニーズに近い形で作っていったということをよく聞く。水巻など人気のある図書館は、そういう形を踏んでいると思う。新しく造れるのであれば、是非そういう段階を踏みながら、作っていくべきである。また、特色が今から大事になってくると思う。中央図書館は、蔵書数も専門性もすばらしいが、そこで調べものをするために静かな環境が必要である。それをサポートするために検索機能をもう少し充実できないかと思う。

戸畑の館長さんと話す機会があったが、施設が古くて、ベビーカーや車椅子で来ると職員の方が上げたりしている。そんな状況で、どうしてこんなに伸ばせたのか不思議であり、聞いてみると、とにかく講座をたくさん実施し、自分の人脈で無料で大学の先生に来てもらったりとか、ビジネス関係の講座を行ったり、それを回数を増やし、広報誌を頻繁に出して、お知らせしていく。中にただけではだめなので、いろんなところに出向いて、今度こんなことをするから、こんな本をいれたからといったような形で、広報活動を盛んにしたというのと、後、一番いいのは窓口の人が、とにかく挨拶してにっこり笑うということであった。

(委員)

図書館に対して市民が求めているものと市の思いには、ギャップがある。図書館は利用人数が増えたから、それで良しとするのか、辛いところがある。図書館が本来目指すものは何なのか。というようなことも丁寧に考えておかないと、行く道を誤るのではないかと私は思う。

(事務局)

今回、ご議論いただくのは、これからの図書館サービスと図書館の機能、配置のあり方である。それを何のためにやるのかというのが先ほどのご意見だったと思う。図書館は、あればそれに越したことはないので、それでは際限がない。行政の立場として、全部できないので、今回の審議会の中で、何を目指していくのか方向付けを行い、その中でまず何をすべきか、するにしても、すぐやるものと、長期でやるべきものといろいろある。

(委員長)

黒崎の旧厚生年金病院跡地が町づくりの観点からはふさわしいという意見が出されている。配置という観点では、それはそれでいいと思うが、もう少し詰めた議論をしなければいけない。そして、もう一方は小倉南区からも要望が出されており、それはそれで、置くべきだというニーズや市全体を見渡してこういうところに図書館を配置すべきだというものが出てくれば、答申として提出したい。いつ実現するかは別である。

北九州市立大学の図書館は、施設・設備の建替え、あるいは増築など、いろいろ模索している。大学の図書館は一般の図書館とは違う特色を持っているが、今も市民が利用できる。更に大きく大学図書館を地域に開放するという観点もある。それに北九大は立地的にも、モノレールが通っていて、大変利用しやすく、駐車場は少し狭いが、それは競馬場の駐車場と相談ということも考えられるだろう。大学図書館と一般の図書館を統合した図書館の可能性を探ることも場合によっては必要（大学側との協議と合意を前提）で、そうすると、新しい観点の統合型の図書館を南区に設置するという展望が開けてくる。もう一つ南区には、前回資料が出されていた城野があるが、そこに何らかの施設を造る計画はあるのか。

(事務局)

城野については議会で今継続審議中だが、今のところ市として道路以外の計画はない。

(委員)

黒崎に、もしできるとすると分館になるのか地区館になるのか。

(事務局)

それも含めて、ここで議論できればいいと思っているが、今のところの黒崎のアンケートをみると分館という規模ではなく、副都心に相応しい施設をとという文言が

出ているので、分館より大きいものになる。ただし、図書館協議会としての意見は全く別でも構わない。市民のアンケートでは副都心に相応しいようなという意見でまとめられている。

(委員長)

戸畑図書館が利用率が高まったのは、先ほど委員が言っていたようなことで、いいのか。

(事務局)

指定管理者になって、建物が古いのにもかかわらず、いろいろ工夫をして、ビジネス支援の講座等をしながら、それに関する本がここの図書館にあるというように、イベントとリンクさせたり、広報誌を作ってPRに行ったりとかいうことで増えたのではないかと考えている。

(委員)

その他の図書館でそのような努力をしようという考えはないのか。

(委員)

門司図書館の館長が、私が勤務しているまちづくり団体に来られ、図書館の利用を上げるために地域の人とつながりを持ちたい、あるいは意見を聴きたいということで、回っているとのこと。それがどういう結果になるかは、次の段階だが、しっかりとそれはされている。

(委員長)

八幡西と小倉南が一つの焦点だが、戸畑をどうするのか、もう50年を過ぎているが…。

(事務局)

図書館の建替えという方向性は出ている。旧戸畑区役所を図書館として活用してはどうかという町の人声があったが、実際に調査してみると耐震構造と建築基準法で、普通に建てるよりもお金がかかることから、それは困難である旨、地元の方々にも説明している。

その後は図書館だけではなくて、D街区の中に入っているので全体をどうするかということで黒崎みたいに図書館だけではなくてまちづくり全体の中で今、検討しているところである。しかし、建替えという話は出ており、具体的にいつ、どこにというのが今からである。

(委員長)

それは、我々が検討することではないのか。

(事務局)

戸畑もどのような特色を持たせるかとか、今のままでいいとか、そういうのはある。おそらく廃止は考え難いので、建替え時に戸畑図書館はどういう図書館であってほしいとか、今のままだもいいという意見もあると思う。もっと全体のバランスなど、いろいろ決まったら、戸畑はもう少しこういうのがあったらいいとか、そういうご意見もいただきたいと思う。

(委員長)

財政などの制約があるのは事実なので、その中でどういう図書館をどこに配置するか、そのときに統廃合というか、地区館と分館を一体化する考え方も、場合によっては可能と考える。それは各地域の事情が違ふし、利用状況も違ふだろうし、そういうところも少し視野に入れたいといけない。

(委員)

統廃合も視野に入れるのか。

(委員長)

一応、そうしないと、あまりにも濃くなり過ぎる。(厳しい財政状況の中、財政負担ばかり色濃く出過ぎて、現実離れした答申になり兼ねない。)

(事務局)

今回、再配置の検討をお願いするのは、中央図書館、地区館、分館、のシステムである。地区館を補完するために分館があると思うが、これだけ交通が便利になり、情報入手が簡単になってきたときに、今のまま建替えであれば、別にこの場を設けて議論いただく必要はない。予算さえ付けばできる。そうでなくて、今後の図書館機能そのものを、もう一度この審議会で見直していただきたい。そのためには図書館の機能論から入らないといけない。それによって施設をどうしていくのか、場合によっては、旧五市に一箇所ずつあったものを便利なところに再配置していくという事は考えられる。

(委員)

分館とするか、地区館とするかによって、アンケートのとり方も違ってくると思う。

(事務局)

分館をなくして、全部地区館クラスで、という考え方もある。分館でないといけないわけではない。そのときに全部地区館にしてしまうと、財政的に大変なので、全体的に調整する必要がある。

(委員長)

アンケートのとり方もいろいろあると思うが、特に利用していない人に対してどういうとり方をするか、統廃合まで踏み込み難い。まずは、どういう図書館が望ましいか、どういう図書館を期待しているか、どれくらい利用しているかなど基本的なことをアンケートで明らかにする必要がある。その結果どういう配置で、どういう図書館を建てればいいのかという問題が出てくる。新しい図書館を建てる場合は、具体的なことをアンケートで聴くことができる。しかし、今回の場合は、その辺が難しい。直接ストレートに聴いていいのかどうか。例えば、黒崎に建つことが決定すれば、新しい黒崎の図書館はどうあるべきかという設問も考えられる。今のところ市民が市立図書館を広い意味でどのように利用しているかやこういうところがほしいという要望とか、そういう部分をアンケート調査していくことが考えられる。アンケートの方法、内容等を詰めて再度お諮りするということで、いつ頃までに確定すればいいのか。

(事務局)

次回、3月末ぐらいにもう少しアンケートの案とまではいかないが、今日の皆さんのご意見を踏まえて、専門家にも聞いて原形原形くらいの、もう少し今日よりは具体的な項目を皆さんに議論していただく材料として提供したい。もう1回、次の次くらいに、アンケートの原案を示すことができればと思っている。

(委員長)

今の時代の中で、今の北九州市の状況の中でどういう図書館が望ましいのか、そして、どこに配置すべきか、それらを展望する上で、市民ニーズをどのように汲み取るのか、アンケート調査をどのように行うのかなどの意見が出された。新しい時代に合った図書館、それぞれに個性を持った図書館を構築しないといけない。

(事務局)

今回は、図書館協議会の開催ということで、3月末に予定している。開催日については別途連絡する。アンケートの内容、ご意見、ご提案があれば、随時生涯学習課まで、ご連絡いただきたい。